

～新時代を生きる子供たちとその保護者の皆さまへ～

# 「幸せの扉をこじ開けろ」

「世のため、人のために生きるという事」

このレポートは、日頃、公私に亘り良きアドバイスを頂いている人生の大先輩であるA氏から伺った「深イイ話」を纏めたものです。本当に本当に「深〜い話」だったので皆さんにもその内容のお裾分けをしたいと思います。

## ■その1■

もう30年以上も前の事だが書き留めておきたい事がある



←ブルンジの国旗

皆さんは「ブルンジ共和国」という国を知っているだろうか。アフリカ中央部の人口1000万人程の小国である。長い内戦とクーデター、経済制裁により世界最貧国の一つに数えられている国である。現在、渡航中止勧告対象（レベル3）なので日本人は行けない事になっている。

そんな国に私は20歳台後半の時に海外出張に出かけた事がある。その国には、当時、空港は1か所のみ。パリ経由で快適な空の旅の筈だったが、着陸1時間程前に何と国全体が停電となり、あろう事か滑走路の誘導灯までもが消えるというとんでもない事態に遭遇する程の国なのである。その時、時間は夕刻。こんなハプニングからブルンジの1日目が始まったのだった。

その頃の私は某グローバル自動車会社の「若手企業戦士」の一人として「日の丸」を背負って、アフリカと言わず世界中を飛び回る生活を送っていたのだが、これから起こるであろう何かの予兆だったのかも知れない。我が人生、後にも先にも搭乗する旅客機の半胴体着陸はこれ1回だけ。最初の気持ちは「ここで本当にビジネスができるのだろうか？」は至極、当たり前の感想だろう。





## ■その2■

### ビーチサンダル・安いTシャツ・そしてボールペン



投宿する事になったホテルの窓の外を眺めると何もない赤褐色の地面に所在無げな人影が  
無数、目に飛び込んできた。外に出るときは金品をせびられるからと「ビーチサンダル」「安  
手のTシャツ」、そしてノベルティグッズの「ペン類」を持って上司に言われた通り外出  
したまでは良かった。



長い会議と商談の後の束の間の一人になれる時間は貴重な。が、予想通りの展開。あつと  
いう間に今までじっとしていた無数の人影、実は現地の子供たちだったのだが、待ってま  
したとばかりにこちらへ向かってくるではないか。その間、不気味な程に無口のにじり寄  
ってくるのだ。「ああ、こういう事か。上司が「気を付けろよ。」と言ってたのは。」と、こ  
こで気づいてももう遅い事態なのだが。



## ■その3■

### 地面をノート代わりにその場限りの「青空授業」



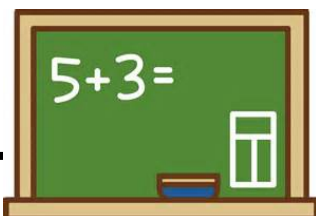
ふと気が付くと、一人のやけに前歯が大きく白い少年が近寄ってきて何か言っているでは  
ないか。「■△※○×・・・」。全く言葉が分からない。突然、持っていた棒切れで地面に動  
物の絵らしきものを描き始めた。そして、又、「■△※○×・・・」。今度はそこにいた全員  
が一斉に何かを言い始めるという事になってしまったので、事態は收拾不能なのだった。



嫌な予感が頭をよぎってきた。「何で俺に？」だ。仕方がないので少年の棒切れを取り上げ  
て地面に書いたのは算数の足し算「 $1 + 1 = 2$ 」と。そして同時に先ほどの「ビーチサン  
ダル」を2足分を置いてその場しのぎを敢行したのだ。よせばよかったと、即、後悔した  
のは急に数人の子供たちが反応したと同時にほぼ全員が走って何処かへ消えてしまったで  
はないか。



ならばこちらも逃げるが勝ち。ホテルに戻る態勢をと一息入れたのだった。暫くすると、  
遠くから「チノ！チノ！」と声が段々と近付いてくる。「俺はチノじゃないぞ。日本人知ら  
んのか？・・・。まあ、いいか。」これも折り込み済みだから。





## ■その4■

### KOKUYOのノートと「小テスト」



その中の一人の少年が先回りして自分の正面に立ち塞がり、何やら見せてきたモノがある。よく見ると、何とそれはKOKUYOのロゴ入りノート。勿論、日本では見慣れた正真正銘の日本製の真っ新な何も書かれていないノートだった。又も「■△※○×・・・」と、今度は何となくその要望が読めてきた。



「ここに何か書いてくれ！」と言っているのである。早速、その場限りの「青空教室」がスタート。最初はノートに何気なくアルファベットで名前を書いたり、又、「何かもっと書いて！書いて！」と何度も切望する眼差しに負けてしまい、ではとばかりに「四則計算」を教えて、その場で「小テスト」を敢行したのだった。

## ■その5■

### この問題が解けないと家族は生きていけない・・・だから



正解の度に自分の用意した品物が無くなっていくこの状態はどう説明すれば良いのか、兎に角、さっき迄無表情極まりない子供たちが見る見る内に「正解すると何かモノが貰える」からだろう。必死なのである。突き刺さるような視線が方々から投げられていても自分の視線を逸らすわけにはいかないこの緊張感は正直キャパオーバー感満載だった。これ程に多くの熱くて突き刺さるような視線を浴びる経験は未だに一度も巡ってきてはいないのであるが、衝撃的な事が分かってきたのである。



彼らは生きる為に競って問題にチャレンジし、正解して貰ったモノを闇市場に売り、カネに変えるのだ。我れ先にと。この「食欲さ」と「勤勉さ」はどう考えれば良いのだろうか。生きる事と学ぶ事がこれ程までに直結した分かり易い世界は終戦直後の日本には極く普通にあった事なのだろうが、今の恵まれたモノが有り余っている現代日本ではとても想像もできない。その間、1時間程の事だったと思う。緊張し夢中に子供たちと接していた自分は全く時間が経過するという感覚が失せていたのです。



一つだけ言っておこう。この光景の一部始終はしっかりと誰かに見られていたのである。それは機関銃を肩から吊り下げた治安維持軍の現地兵士たち。部族間の闘争で国が混乱に陥る予兆がその時すでにあっただろう。下手したらこちらに銃口を向けられたのかもしれないと後でわかったことであるが、あの子供たちにとっては「命懸けの行動」だったのだ。命を懸けての「青空授業」これが本当の世界を知る事なのだと思う。物語は続く。





## ■その6■

### あの時のあの少年だったのか？本当は分からないが



それは私が欧州統括本社の事業部長として赴任していた某国某都市での事。あれから20年以上が経ち、既にあの時の出来事は完全に自分の中では風化していたのだ。長いビジネス生活の中でアメリカ・アフリカ・アジア&大洋州、更に、欧州を駆け巡る自分史の中ではどうしても良い記憶となっていたのです。だが、その瞬間は来た。それは盛大なクリスマス・パーティーでの事。場所は某国某都市にある大使館のレセプション会場のホテル。いつもの通りその場所で談笑していたのだった。

## ■その7■

### 「四つ折りの薄汚れた紙片」を宝物のように見せてくれた



その人は大使館に勤める書記官らしき人。日本人ではない。聞けば或る事がきっかけとなってアフリカの某国を脱出して、その後、猛勉強してフランスに留学の幸運を得たそうだ。相当のエリートなのである。年の頃は20台後半か30前後かと思われるが、実に知性的で教養に溢れた好男子なのである。その彼が言った。「自分はその時のあの事が無ければ今の自分はない。生きる力の尻尾を掴む事ができたのはこの小さな紙片が・・・」と見せてくれた物がある。



何ともヨレヨレの薄汚れた紙片なのである。表面に何か書いているが判別できない。だが、彼にとっては大きくその後の人生を変えた大事な大事な「宝物」である事は容易に分かった。恐らく、事あるごとに誰かに尋ねているのだろう。彼は、「恩人」を探す為に常にそれを持ち歩いていると語っていた。その為に並外れた精神力と努力で勉強し続け、世のため、人のために役に立つ生き方を求めているという事。何故なら、その大使館の母国は彼の故郷の国への経済援助が最大唯一の命綱だったからなのです。その為にそこで精一杯働いていたのです。聞けば国には両親・兄弟姉妹が残っているが、なかなか連絡が取れないと分かったのです。





## ■その8■

### 生きる為に学び、学んだ事を人の為に活かす生き方



もしかしたら、その「恩人」とは自分だったのかも知れないし、又、別人だったのかも知れないのだ。自分より先にKOKUYOのノートを与えた知らない日本人ビジネスマンが実際に居たのであるから。しかし、かのクリスマスパーティーに参加していたのは数百人にも及ぶ規模の大きいイベント。その中での偶然の出会いとは言いながら何かに導かれるように出会った2人だったのである。



何と清い生き方なんだろう。きっと、世界の隅々のどこかで今日も同じようなストーリーが生まれ、そして、時を経て人々の巡り合わせの中から「学ぶ事の尊さ」や「人の為に生きる」事の素晴らしさを噛みしめているのだろう。



今、世間に問い正したいのである。我々大人たちは子供たちを本気で生きる事の意味を伝えているだろうか。大人の理屈で子供たちの未来の輝かしい芽を摘み取ってはいないだろうか。「幸せな人生」とは何なのかをお子様と話す機会を持ってほしいと切に願うばかりです。その後の彼は、今、どうしているだろうか。或る日本の商社に勤務しながら「恩人」を探す旅を今も続けているらしいと、とある経済雑誌に記事として取り上げられていた事をここで記しておこう。(完)



## 英才個別学院 長後駅前校・桜が丘校

### >長後駅前校

〒252-0807 神奈川県藤沢市下土棚 465-2 カナメビル 2 F

TEL:0466-43-8833 メール:chogo@eisai.org



長後駅前校

### >桜ヶ丘校

〒242-0014 神奈川県大和市上和田 979-1 シルバーコーポ 桜ヶ丘 3F

TEL 046-279-6677 メール:sakuragaoka@eisai.org



桜ヶ丘校



\*\*\*\*\* 塾代表（教室主宰：宮入直登）からのメッセージ \*\*\*\*\*

子供に対して「幸せな人生」を送ってほしいと全ての親は思っています。しかし、本当の「幸せ」とは何ですか。大金を手にして「勝ち組」の豪華な生活を送る事ですか？辛い大変な勉強を通じて人の為に生きる道を見つける事、これこそが「幸せ」ではないかと考えるのです。子供たちには「幸（さち）組」を目指してほしいと、真剣に塾業を天職として日本の未来と子供たちの将来を夢見て日々働き続けています。

